

主日聖体礼儀

単音聖歌譜



司祭祈祷

注意 譜面中、五線譜上に ||o|| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈祷文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2016年 2月 25日 作 成
2025年 3月 14日 一部改訂

釧路ハリストス正教会
管轄司祭ステファン内田圭一

司祭) (黙誦：天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者

よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を

もろもろ けがれ いさぎよ しぜんしゃ われら たましい すく たま
諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。

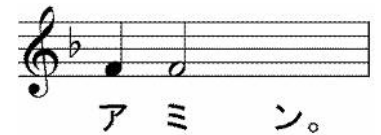
いと高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、至と高き

には光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、

主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす、

我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

司祭) 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世に、



【 大聯禱 】

司祭) 我等安和にして主に禱らん、



司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



司祭) ^{きょうかい} 教會を ^{つかさど} 司 ^{そんき} る尊貴なる ^{われら} 我等の ^{ぜんにほん} 全日本の ^{ふしゅきょう} 府主教 ^{しさい} セラフィム、^{そんぴん} 司祭の尊品、ハリス

^よ トスに因る ^{ほさいしよく} 輔祭職、^{ことごと} 悉くの ^{きょうしゅう} 教衆、^{およ} 及び ^{しゅうじん} 衆人の ^{ため} 爲に ^{しゅ} 主に ^{いの} 禱らん、



司祭) ^{わがくに} 我國の ^{てんのう} 天皇、^{およ} 及び ^{くに} 國を ^{つかさど} 司 ^{もの} る者の ^{ため} 爲に ^{しゅ} 主に ^{いの} 禱らん、



司祭) ^こ 此の ^{まち} 都邑と ^{およ} 凡 ^{まち} の都邑と ^{ちほう} 地方の ^{ため} 爲、^{およ} 及び ^{しん} 信を ^{もつ} 以て ^こ 此の ^{うち} 中に ^お 居る ^{もの} 者の ^{ため} 爲に ^{しゅ} 主に ^{いの} 禱らん、



司祭) ^{きこうじゅんわ} 氣候順和、^{ごこくほうじょう} 五穀豊穰、^{てんかたいへい} 天下泰平の ^{ため} 爲に ^{しゅ} 主に ^{いの} 禱らん、



司祭) ^{こうかい} 航海する者、^{もの} 旅行する者、^{りょこう} 病 ^{もの} を患うる者、^{やまい} 艱難に ^{うれ} 遭う者、^{もの} 擄 ^あ となりし者、^{もの} 及び ^{とりこ} 彼等の ^{もの} 救 ^{およ} の ^{ため} 爲に ^{しゅ} 主に ^{いの} 禱らん、

^{かれら} 彼等の ^{すくい} 救 ^{ため} の ^{しゅ} 爲に ^{いの} 主に 禱らん、



司祭) ^{われら} 我等 ^{もろもろ} 諸 ^{うれい} の憂愁と ^{いかり} 忿怒と ^{あやうき} 危難とを ^{まぬが} 免 ^{ため} るるが ^{しゅ} 爲に ^{いの} 主に 禱らん、



司祭) ^{かみ} 神よ、^{なんぢ} 爾 ^{おんちよう} の恩寵を ^{もつ} 以て、^{われら} 我等を ^{たす} 助け ^{すく} 救 ^{あわれ} い憐 ^{まも} み護れよ、



司祭) ^{しせいしけつ} 至聖至潔にして ^{いた} 至りて ^{さんび} 讚美たる ^{われら} 我等の ^{こうえい} 光榮の ^{ぢよさい} 女宰、^{しょうしんぢよ} 生神女、^{えいていどうぢよ} 永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん} 諸聖人を ^{きおく} 記憶して、^{われらおのれ} 我等己の ^{みおよ} 身及び ^{たがい} 互に ^{おのおの} 各の ^み 身を以て、^{もつ} 並に ^{ならび} 悉くの ^{ことごと} 我等の

^{いのち} 生命を以て、^{もつ} ハリストス ^{かみ} 神に ^{いたく} 委託せん、



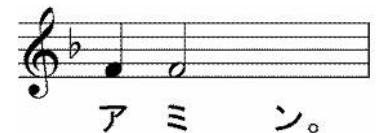
司祭) (黙誦： ^{しゅわ} 主我が ^{かみ} 神よ、 ^{なんぢ} 爾の ^{けんぺい} 權柄は ^{かたど} 像り ^{がた} 難く、 ^{こうえい} 光榮は ^{がた} 測り ^{なんぢ} 難し、 ^{じんじ} 爾の ^{かぎ} 仁慈は限

^な 無く、 ^{じんあい} 仁愛は ^い 言い ^{がた} 難し、 ^{もと} 求む ^{しゅさい} 主宰よ、 ^{なんぢ} 爾の ^{じれん} 慈憐に ^よ 因りて、 ^{みづか} 親ら ^{われら} 我等と ^{この} 此の

^{せいどう} 聖堂とを ^{かえり} 眷み、 ^{われらおよ} 我等及び ^{われら} 我等と ^{とも} 偕に ^{いの} 禱る ^{もの} 者に ^{なんぢ} 爾の ^{ゆたか} 豊なる ^{おんたく} 恩澤と ^{なんぢ} 爾の

^{あいれん} 愛憐とを ^{ほどこ} 施し ^{たま} 給え、)

司祭) ^{けだし} 蓋、 ^{およ} 凡そ ^{こうえいそんきふくはい} 光榮尊貴 ^{なんぢちち} 伏拜は ^こ 爾父と ^{せいしん} 子と ^き 聖神に ^{いま} 歸す、 ^{いつ} 今も ^{よよ} 何時も ^{よよ} 世々に、



【 第一アンティフォン 第102聖詠 】

わ が た ま し い よ 、 しゅ を ほ め あ げ よ 、 しゅ よ な ん
我 靈 主 讚 揚 主 爾
ぢ は あ が め ほ め ら る 。 わ が た ま し い よ 、
崇 讚 我 靈
しゅ を ほ め あ げ よ 、 わ が ち ゅ う し ん よ 、 そ の せ い
主 讚 揚 我 中 心 其 聖
な る な を ほ め あ げ よ 。
名 讚 揚
わ が た ま し い よ 、 しゅ を ほ め あ げ よ 、 か れ が
我 靈 主 讚 揚 彼

ことごとくのおんをわするるなかれ。
 悉 恩 忘 勿

かれはなんぢがもろもろのふほうをゆる
 彼 爾 諸 不 法 赦

し、なんぢがもろもろのやまいをいやす。
 爾 諸 疾 療

こうえいはちちとこいとせいしんにきす。
 光 榮 父 子 聖 神 歸

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世

わがたましいよ、しゅをほめあげよ、わがちゆ
 我 靈 主 讚 揚 我 中

うしんよ、そのせいなるなをほめあげよ、
 心 其 聖 名 讚 揚

しゅよ、なんぢはあがめほめらる。
 主 爾 崇 讚

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの
我等復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あわれめよ。
主 憐

しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、

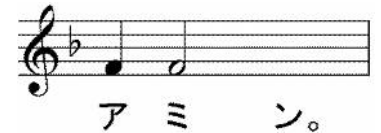


しゅわ かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい
司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會

じゅうまん まも なんぢ どう び あい もの せい なんぢ しんせい ちから
の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力

もつ かれら こうえい われらなんぢ たの もの のこ なか
を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、)

けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
司祭) 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



【 第二アンティフォン 第145聖詠 】

わ が た ま し い よ しゅ を ほ め あ げ よ 、 わ れ い け
我 靈 主 讚 揚 我 生
る う ち しゅ を ほ め あ げ ん 。 わ れ ぞ ん め い の う ち
中 主 讚 揚 我 存 命 中
わ が か み に う た わ ん 。
我 神 歌
ぼ く は く を た の む な か れ 、 す く う
僕 伯 恃 母 救
あ た わ ざ る ひ と の こ を た の む な か れ 。
能 人 子 恃 母

しゅ は た び び と を ま も り 、 み な し ご と
主 は 羈 人 を 護 も り 、 孤 子

や も め と を た す け 、 た だ ふ け ん し ゃ の み ち を
寡 婦 を 佑 、 惟 不 虔 者 途

く つ が え す 。
覆

しゅ は え い え ん に お う と な ら ん 。 シ オ ン よ な ん ぢ
主 永 遠 王 爾

の か み は よ よ に お う と な ら ん 。
神 世 世 王

【 神の獨生の子 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
何 時 世 世

か み の ど く せ い の こ な ら び に こ と ば よ 、
神 の 獨 生 子 並 言

し せ ぎ る も の に し て わ れ ら を す く わ ん が た め
死 者 の に し て わ れ ら を 救 済 爲

あ ま ん じ て せ い な る し ょ う し ん ぢ ゃ ・ え い て い ど う ぢ ゃ
甘 聖 生 神 女 永 貞 童 女

マ リ ヤ よ り み を と り 、 か み の せ い を か え
マ リ ヤ よ り 身 を 取 り 、 神 の 性 を 易

ずしてひととなりじゅうじかにくぎうたれ、
 人 十 字 架 釘

しをもってしをふみやぶりしハリストスカみよ、
 死 以 死 踏 破 神

せいさんしゃのいつとしてちちとせいしんとと
 聖 三 者 一 父 聖 神 共

もにさんえいせらるるのしゅよ、われらをす
 讚 榮 主 我 等 救

くいたまえ。
 給

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわしゅいの
 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐

司祭) かみなんぢおんちようもつわれらたすすくあわれまも
 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しせいしけついたさんびわれらこうえいぢよさいしょうしんぢよえいていどうぢよ
 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじんきおくわれらおのれみおよたがいおのおのみもつならびことごとわれら
 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのちもつかみいたく
 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅなんぢに、
 主 爾

司祭) (黙誦: われらここうどうわごうきとうたまかつにさんにんなんぢなよあつもの
 我等に此の共同和合の祈禱を賜い、曾て二三人爾の名に依りて集まる者に

そのもとところたまやくしゅなんぢみづかいまなんぢしよぼくねがいその
 も其求むる所を賜うを約せし主よ、爾親ら今も爾が諸僕の願を其

りえきためかなわれらこんせなんぢしんりしらいせえいえん
 利益の爲に應わしめて、我等に今世には爾の眞理を識り、來世には永遠の

いのち え たま
生命を得るを 給え、)

司祭) けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま
蓋 爾 は善にして人を愛する神なり、我等光榮を 爾 父と子と聖神に献ず、今も

いつ よよ
何時も世に、



【 第三アンティフォン 眞福九端 】

しゅ よ なんぢ の くに に きたら んと き、
主 爾 國 來

われらをおもいたまえ。しんのまづしきも
我等 記憶 給 神 貧 者

の は さいわい な り、てんこくはかれら
福 天 國 彼

の もの な れ ば な り。
有

なく もの は さいわい な り、かれらな
泣 者 福 彼 等 慰

ぐさみをえんとすればなり。
得

おんじゅうなるものはさいわいなり、か
温 柔 者 福 彼

れらちをつがんとすればなり。
等 地 嗣

ぎ に う え か わ く も の は さ い わ い な
 義 飢 渴 者 福

り 、 か れ ら あ く を え ん と す れ ば な り 。
 彼 等 飽 得

あ わ れ み あ る も の は さ い わ い な り 、
 矜 恤 者 福

か れ ら あ わ れ み を え ん と す れ ば な り 。
 彼 等 矜 恤 得

こ こ ろ の き よ き も の は さ い わ い な り 、
 心 清 者 福

か れ ら か み を み ん と す れ ば な り 。
 彼 等 神 見

わ へ い を お こ な う も の は さ い わ い な
 和 平 行 者 福

り 、 か れ ら か み の こ と な づ け ら れ ん と す れ ば
 彼 等 神 子 名

な り 。

ぎ の た め に き ん ち く せ ら る る も の は さ い わ
 義 爲 窘 逐 者 福

い な り 、 て ん こ く は か れ ら の も の な れ ば
 天 國 彼 等 有

な り 。

ひとわれのためになんぢらをののしりきん
 人我爲爾等話のしりきん
 ちくし、なんぢらのことをいつわりてもろ
 逐爾等事論諸
 もろのあしきことばをいわんときはなんぢらさい
 悪言言言時爾等福
 わいなり、よろこびたのしめよ、
 喜樂
 てんにはなんぢらのむくいおおければなり。
 天爾等賞多

司祭) (黙誦: ^{しゅさい}主宰・^{しゅ}主・^{われら}我等の^{かみ}神、^{しよてん}諸天に^{てんしおよ}天使及び、^{てんししゅ}天使^{ひんきゅう}首の^{ぐんたい}品級と^た軍隊とを立て

^{なんぢ}爾が^{こうえい}光榮の^{ほうじしゃ}奉事者となしし^{もの}者よ、^{もと}求む^{われら}我等の^い入るに^{ともな}伴いて、^か彼の^{われら}我等と

^{とも}偕に^{つと}務め、^{とも}共に^{なんぢ}爾の^{しぜん}至善を^{さんえい}讚榮する^{せいてんしら}聖天使等の^い入るを^{いた}致させ^{たま}給え、^{けだし}蓋、^{およ}凡

^{こうえい}そ光榮^{そんきふくはい}尊貴伏^{なんぢちち}拝は^こ爾^{せいしん}父と子と^き聖神に^{いま}歸す、^{いつ}今も^{よよ}何時も^よ世々に、)

司祭) ^{えいち}睿智、^{つつし}肅^たみて立て、

【 聖入の句 】

きたれ、ハリストスのまえにふしおが
 來前伏拜
 まん。かみのこしよりふくかつせ
 神の子死復活
 ししゅよ、なんぢにアリルイヤをたてまつ
 主爾奉



※ 聖体礼儀②へ